

2020年7月12日聖餐式説教

本日は7月の第2日曜日、日本聖公会が定める「海の主日」です。全世界のミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きおよび港の仕事に従事する人とその家族のため、代祷と信施をささげる日曜日と定められています。

世の中すっかり飛行機が主流の時代になり、移動するのが常識になりましたけれども、原油や貿易物資など、まだまだ船で運ばねばならないことがたくさんあります。飛行機でしたら短時間で到着することが可能ですが、船の場合は相当の時間を要する上、海上の危険にさらされつつ、その任務を果たさねばなりません。海での仕事はいつも危険と隣り合わせです。こうした人々のための働きが、ミッション・トゥ・シーフェアラーズであり、現在もその働きが全世界で続けられています。

ミッション・トゥ・シーフェアラーズは世界各地の港に拠点を持ち、船員（海員）のための働きを続けています。彼らにとって港への停泊期間は貴重なリフレッシュの時です。そこでミッション・トゥ・シーフェアラーズは、港に宿泊施設等を設置して、停泊期間中に家族と一緒に過ごせるようにしたり、停泊がまとまった期間になる場合は、旅行もできるようにするなどの働きもあります。また、大変残念なことに海上で船員が逝去した場合は、葬儀の役割もミッション・トゥ・シーフェアラーズの重要な任務です。

こうしてミッション・トゥ・シーフェアラーズは、船が港へ停泊している間という、限られた中で船員たちへの働きを続けています。日本では横浜・苫小牧・神戸に拠点が設けられています。

しかしながらミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きも困難を抱えています。船が港へ停泊している間、船を所有する会社は港へ低俳句料を支払わねばなりませんので、経営上、港への停泊期間を最小限にしようとしています。また船の設備も電子化により、船が大型化するのに対して船員は逆に減少し、船員たちは港の停泊期間が短縮される上、数少ないメンバーでより大きな船の運航をせねばならないのです。また航海は安全が保障されているわけではなく、海賊が出没して彼らの行く手を阻み、命をも危険にさらしています。それに関わるミッション・トゥ・シーフェアラーズの働きも、困難が増えています。

私たちの日々の生活が、こうした船員（海員）によって支えられていることを改めて覚え、本日はそのための働きであるミッション・トゥ・シーフェアラーズのため、代祷と信施をささげるわけです。埼玉県は海に面しておりませんが、海を通して私たちの生活が支えられていることに変わりはありません。そのことを再認識すると共に、教会が船員たちに関わり続けてきたことを、改めて覚えたいと思います。

本日の福音書に目を移してまいりましょう。本日の福音書は、種まきのたとえ話選ばれていました。神様のみ言葉が種にたとえられ、私たちの心が畑にたとえられています。神様のみ言葉は私たちの心の畑で、しっかりとした根を張り、立派な実を結びたいと叫び続けているのに対し、私たちはどうしているだろうかを改めて考える日です。

私たちの心には、石地も土の薄いところも、茨も、よい土地もあります。よい土地を増やし、そうでないところを狭めていくことを主イエスは私たちに教えようとして、この種まきのたとえ話をされたのです。たとえ話を聞いたガリラヤの人々にとって、種まきは日常の風景でした、誰もが知っている風景を通して、主イエスは神の国について語られたのです。聖書に記されているたとえ話は、神の国を知る重要な手がかりです。

さらに主イエスは、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだと語っておられますが、これは多い方がよいわけではないのを現しています。私たちの世界では数が多い方が評価されることになりすけれども、神の国では数は問題ではありません。それぞれが自分の力に応じて実を結ぶことが大切であり、数が問題ではないのです。百倍の人でも三十倍の人でも、神様は等しく喜んでくださる、自分の賜物をささげつつ、神様のために日々生きていくことの大切さが語られています。

私他の心に蒔かれた神様のみ言葉は、どのような状態になっているでしょうか。よい土地で十分に育ち、何も心配はいらないという人はいないでしょう。私たちの心で叫び続ける神様のみ言葉の声を、今一度耳を澄まして聞いてみましょう。特に今年には新型コロナウイルス感染拡大により、自分のことで精いっぱいな人が多いような気がします。そうした中で、神様のみ言葉は私たちの心で何を語っているのでしょうか。改めて耳を澄ましてみたいものです。